

日本の手仕事の現状分析と〈現場の見える化〉および今後のデザインの関わり方の可能性についての考察 Vol.3

大阪芸術大学 デザイン学科 教授 永田麻美

取り組みの目的

日本の伝統工芸や手仕事は、この半世紀で、その立ち位置を大きく変える事となった。

この研究を立ち上げた当初は、下記の経緯を経て、今の伝統工芸を見つめ直す事を目的としていた。それは<1970年代の高度経済成長に始まり、バブル期の到来と崩壊、その後の「失われた20年」と呼ばれる期間を経て、ようやく経済が立ち直るように見えた矢先のリーマンショック、そして、2020年から数年に渡って世界を襲ったコロナ禍による日常生活の激変。その激動の中で、かつて日常生活品として日本人の生活に深く根付いていた伝統工芸品および手仕事品は、その後の経済の変遷に揉まれ、安い価格で海外生産された品々に脅かされていく。その結果、伝承されていた技術は製作者の高齢化に伴い失われつつあり、また、従事者の生活の安定に対する将来の不安から、若い継承者が減少傾向にあった昨今。そこから派生した、日本の伝統工芸の技術を未来に残していけるのかという大きな問題を抱えているという現状があった。そんな中、日本の伝統工芸および手仕事に対してデザインが出来る役割は何なのか、という、自身の問題意識から、この研究を始めるに至った。そして、この数年で現状は更に大きく変化しつつある。それは数年前から身近になった AI の台頭である。この現状を受けて、その立ち位置に大きな変化を感じるからこそ、現在、伝統工芸は研究対象として益々興味深いものとなっている。

1. 研究対象

今回、研究対象として調査をさせていただいたのは、下記の3つの工芸品の制作現場である。

- ① 長崎鼈甲（長崎県）：安龍工房
- ② 二風谷アイヌ工芸（北海道）：貝澤徹氏、貝澤守氏、
- ③ かご細工（岩手県）：花香房

それに加えて二風谷アイヌ工芸については、平取町アイヌ施策推進課の吉原秀喜氏にもヒアリングさせていただいた。それぞれの取材対象についてのまとめは下記である。

（取材に加えて各社の HP 他より抜粋・参照）。

<長崎鼈甲：（有）安田：安龍工房>

鼈甲文化が花開いた長崎の地に 1969 年に創業。初代の安田龍夫氏が新しい表現に挑戦し続け斬新な製品を発表し業界に新しい風を吹き込んだ。現在は二代目の藤原慎二氏がその思いを受け継ぎ、立体作品など更に新たな技法を開発、挑戦されている。

<二風谷アイヌ工芸：貝澤守氏、貝澤徹氏>

※貝澤守氏：アイヌ伝統工芸作家。木彫り職人であった先代の守幸氏のもと、21 歳から作品作りに携わる。2010 年には国土緑化推進機構のコンクールで<森の名手、名人>に全国 80 人の中、道内でただ 1 人選ばれる。<貝沢民芸>店主。

※貝澤徹氏：アイヌ伝統工芸作家。明治時代に名工と言われた貝澤ウトレントク氏を祖父に、工芸家の勉氏を父に持ち、独自の感性と技術で作品を制作する。北海道アイヌ伝統工芸展北海道知事賞ほか多数受賞。<北の工房つとむ>店主。

<かご細工：花香房>

2020 年より、工房が所有する山林に自生する胡桃や山葡萄の樹皮で作品造りを開始。2015 年には大阪や仙台のデパートでの展示販売を始め、2020 年からは盛岡市内での販売も始まる。また近年は遠野市内でワークショップも開催するなど、その活動を広げておられる。

2. 研究方法

- ① それぞれの現地に赴き、制作の現場である各工房を取材。各社の代表にインタビューを実施し、現状を把握。
- ② 産業の生まれた背景や歴史を、現地の視察ならびに現地の資料館等を訪れる事で学ぶ。
- ③ それぞれの伝統工芸を、その歴史から作成方法、現状の分析の観点まで含め、講義資料として作成。

4. 研究結果

前期の取材先 3 か所に対して、以下の質問を基にヒアリングを深めていった。

- 1) 今の伝統工芸（日本の手仕事）に足りないところ
- 2) これからの伝統工芸（日本の手仕事）に必要な事
- 3) 他者にはない強みや独自性
- 4) 新しい取り組み
- 5) 自身の活動の中で国や社会に足りないと感じている点
- 6) 日本と海外の距離感や違いを感じる点
- 7) 伝統工芸（日本の手仕事）を続ける中で、今、若い人達に望む事

<それぞれの現状と取り組み>

●長崎鼈甲：（有）安田：安龍工房

鼈甲工芸は本来、分業制が主だったそうだが、安龍工房では分業は行わず、素材の加工から完成までを一貫して実施制作されている。それにより、独自の世界観の作品が出来上がっている。また常に新しい技法も研究を続けオンリーワンの鼈甲製品を生み出すことに成功されている。

ただし鼈甲工芸を取り巻く現状としては、1973 年に採択され、1975 年に発効されたワシントン条約により、鼈甲の原材料であるタイマイの甲羅は日本への輸入が禁止された。そのため、現在の鼈甲製品の生産は日本国内に残っているタイマイの甲羅しか使えず、それを使い切れれば終わってしまう。また、作られた鼈甲工芸品も海外へは輸出できず、日本国内で購入された製品も国外には持ち出せない。そのような現状の中、今後どのように鼈甲工芸の伝承をしていくのが大きな課題となっている。

●二風谷アイヌ工芸<貝澤徹氏、貝澤守氏>

アイヌ文化という、他に類を見ない独自の文化の中で生まれ、伝承されてきたアイヌ工芸。その唯一無二性が強みである。現在は海外、特に欧米からの訪問も多く、またアイヌ文化などの紹介要素を併せ持つ漫画作品が 2014 年から発表された事から若い世代が訪れることも増えた。若い世代に興味を持って貰うには、このようなキッカケが大切だと感じているという。加えて、これをキッカケにそれまでは少なかった女性の購買者が増えた事も変化として挙げられる。

また平取町ではアイヌ文化博物館の設立を始め、担い手の育成・文化継承などアイヌ独自の歴史や文化を守る活動を推進している事も、大きな特徴だと感じた。

●かご細工<花香房>

花香房を主催されている佐藤氏が自身の山林を持たれているのが強みであり、特徴でもある。そこから取れる豊かな資材を基に、かご細工に止まらない自由な形の作品を日々研究されている。制作された作品は各地のデパートや催事場、道の駅などで販売し、それを見た催事関係者からも声が掛かるなどし、徐々に販路を広げている。またワークショップなども行い、手仕事の魅力を一般に広める活動も積極的に実施されている。

3. デザインにおける、今後のアプローチ

今回の取材で特に考えさせられたのは、長崎鼈甲工芸の現状である。その現実を目の前にして、私自身、驚きを隠せなかった。そして、デザインで出来るビジュアルアプローチを考える前にデザイナーが出来る事とは何かを深く考えさせられた。<出来る事>、それは、この現状を少しでも多くの人に知って貰い伝統的工芸品に指定されている長崎鼈甲の工芸を後世に絶やさず繋いでいくという行動から考えるべき・・・それもデザインが出来るアプローチの一つではないかと考えた。

伝統工芸および日本の手仕事の現状は環境や地域の取り組みにより様々であることが、今回の 3 年目の取材で改めて確認できた。それぞれの伝統工芸と手仕事の現状を多くの人が把握し、日々変わる環境の中でどのような手段を用い如何に次の世代に伝承していくべきかを日本のクリエイティブ全体の問題として、関係者のみならず、より多くの人々が考えていく未来がある事が望ましいと改めて強く感じている。